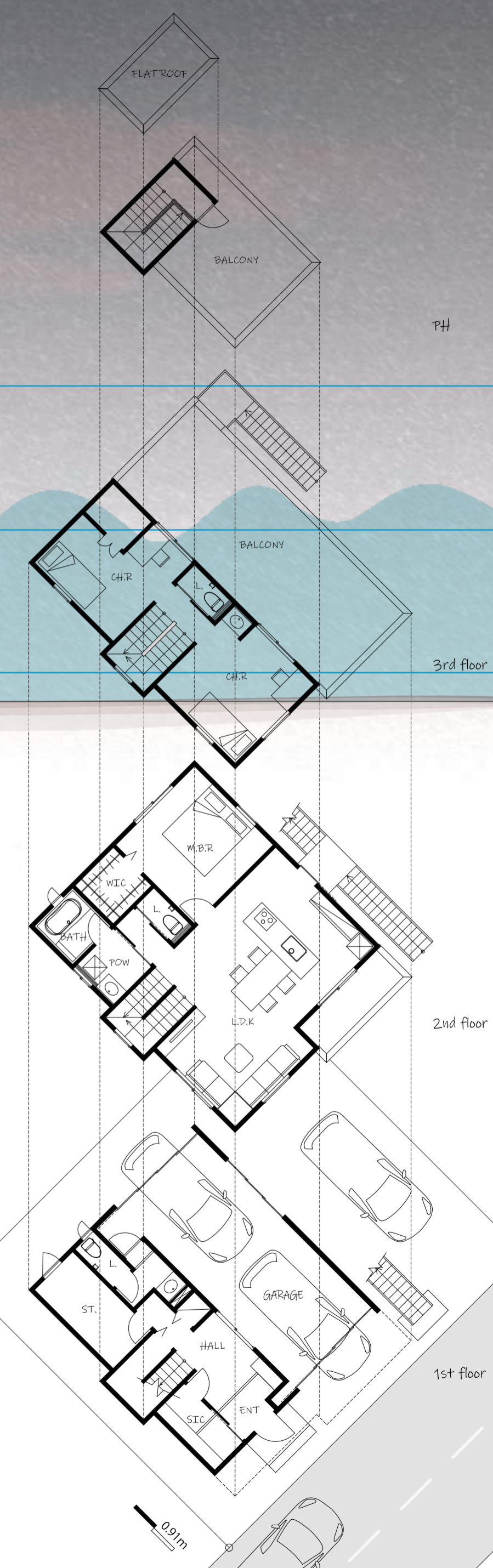
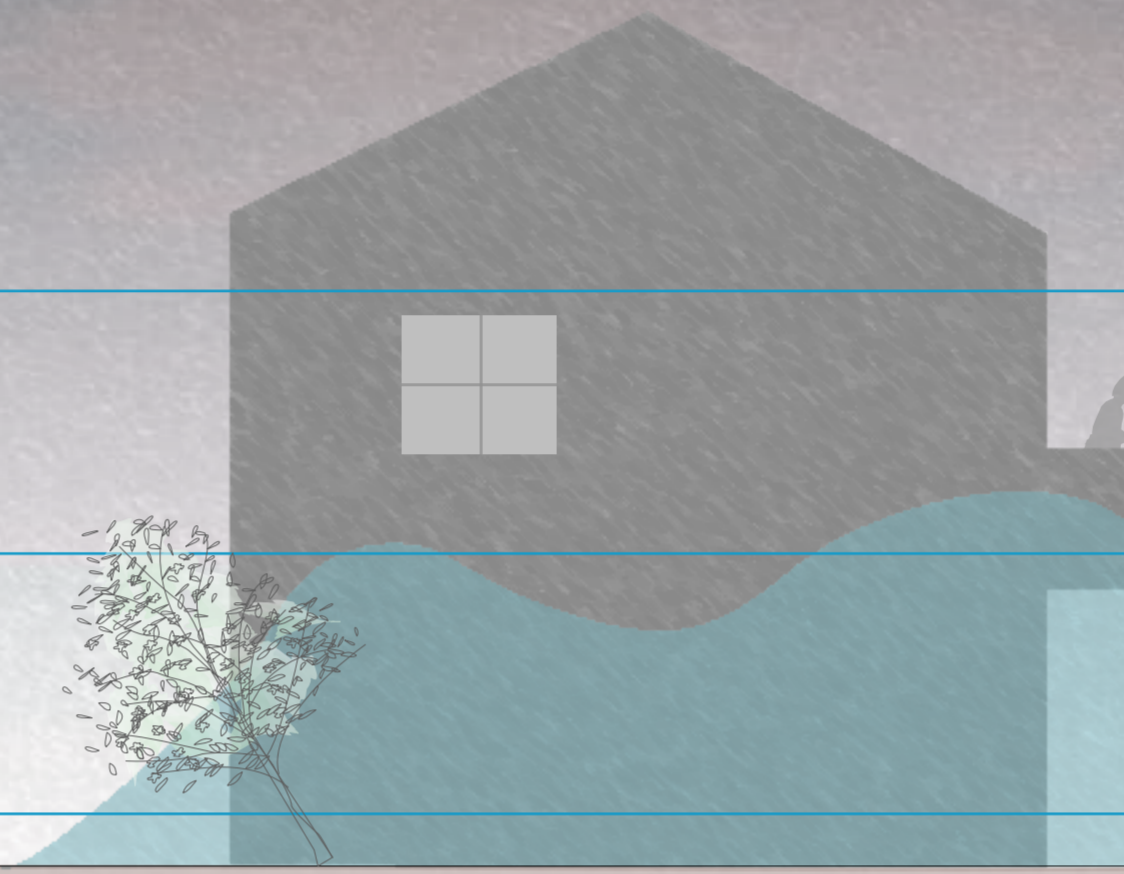
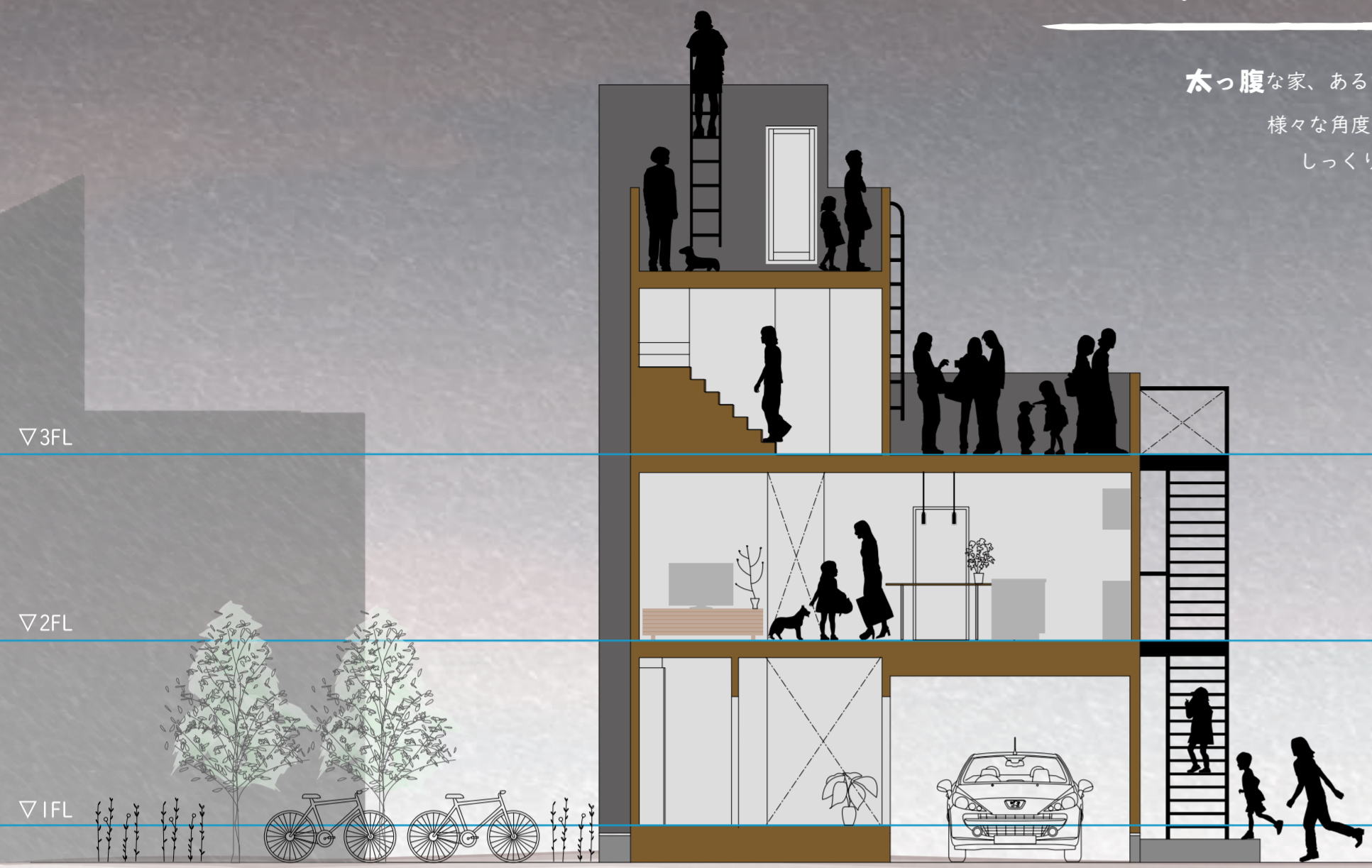


地域に開放された避難バルコニーのある家

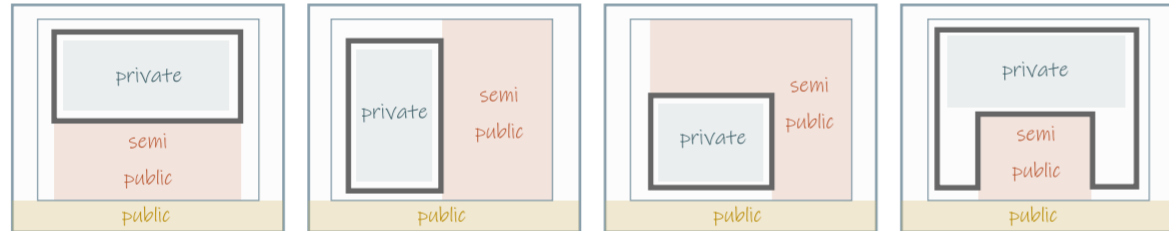
太っ腹な家、あるいは寛容な家という言葉から連想されるものは幾重にもあるように思う。

様々な角度から新しい『太っ腹』の在り方のようなものを考えてはみたが、しっくりくるのはやはり、世のため人のための『太っ腹』であった。

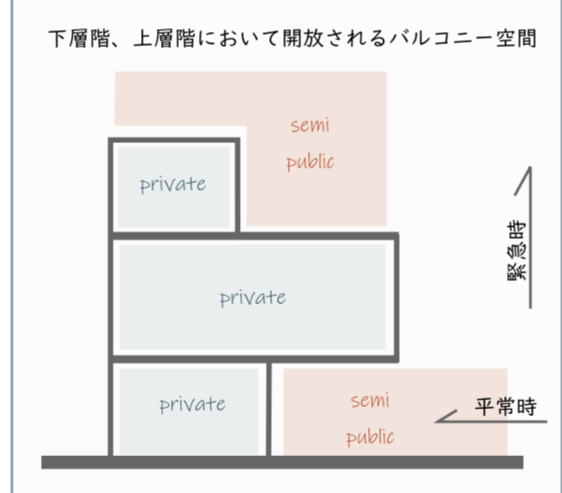
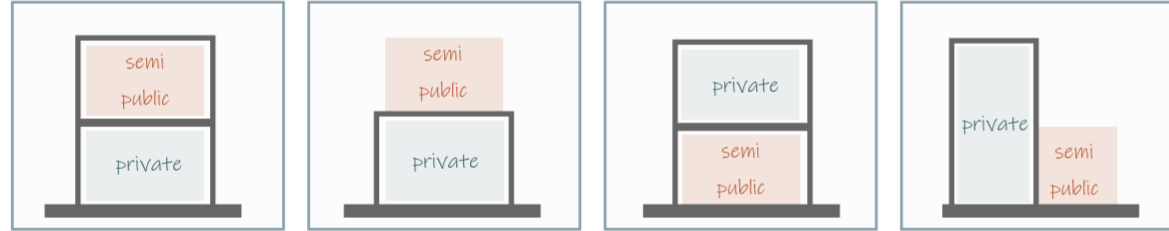


<生活スペースと避難スペースのゾーニングの検討>
semipublic: 周辺住民に任意で開放できる空間

①平面的な可能性



②断面的な可能性



住宅として求められるプライベートな空間と、地域住民に開放できる空間のゾーニングパターンを検討。地域住民のためのスペースは災害発生時、家主が不在でも使用できる必要があるため、必然的にプライベート空間より手前に置かれる。またバルコニー空間も外部から直接アクセスできるものでなければならない。

右は平時のイメージ。豊かな外部空間を構成し、町内会のイベントなどを行い日頃から地域に開放利用してもらうことで有事の避難場所として地域住民の潜在意識に根付かせる。

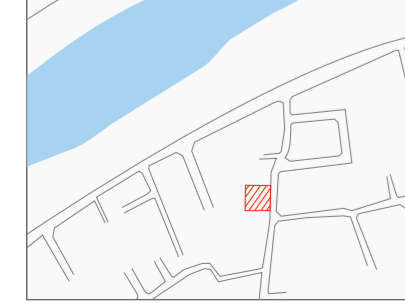
IMAGE



DIAGRAM

CONCEPT

〇敷地は河川沿いの住宅街を想定

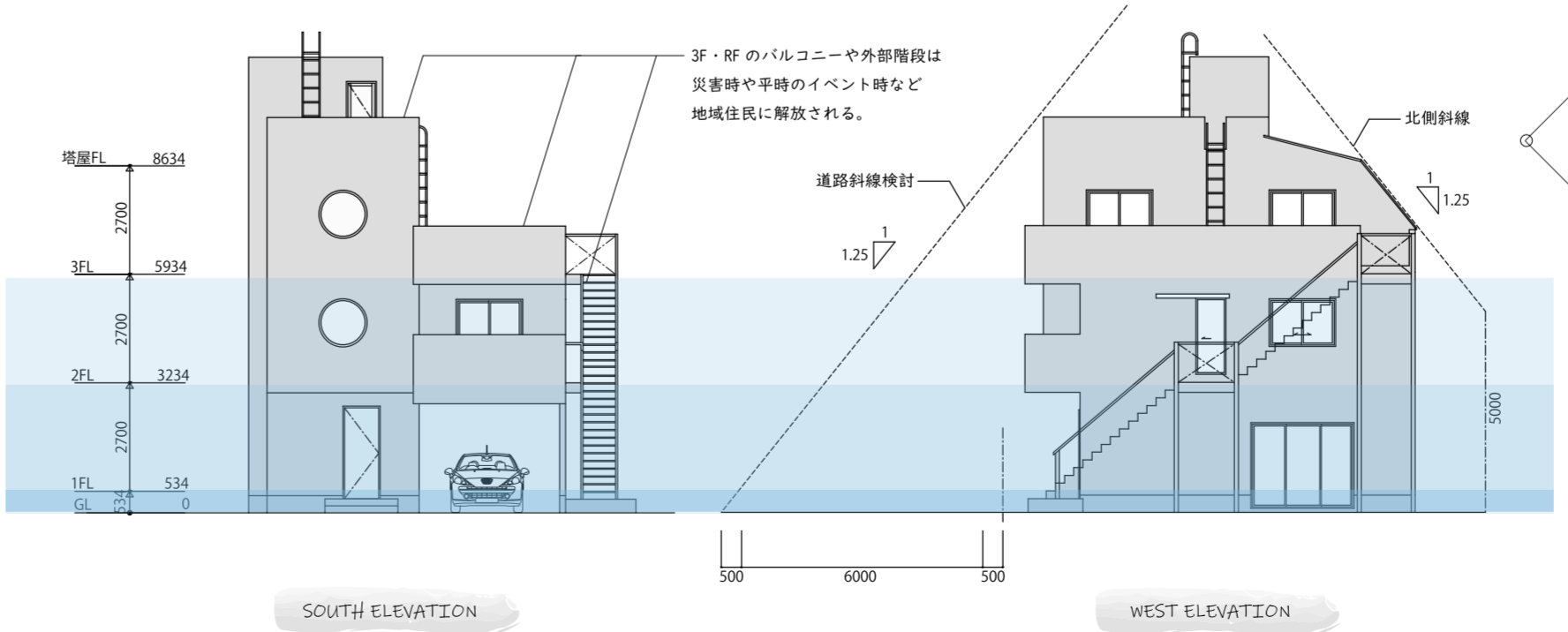


こここのころの日本は多くの自然災害に見舞われ、連日被害の大きさや被災者の状況を伝える記事・ニュースが報道されている。そしてその度に決まって目にする映像。それは2階建ての住宅が氾濫した河川によって水没し、屋根からへりによって住人が救助される映像である。

これまでの想定を超えるレベルの河川の氾濫による水位上昇はもはや想定内になりつつあり、『災害時に命を守る』という事が、これからの家づくりにおいて無視することは出来ない課題となってきている。

私たち自身東日本大震災を経験した身であるが、当時を振り返ると自分や家族の事で精一杯で、隣近所に気を配ることなど到底出来なかった。沿岸部の津波による被災者においては尚更であったらと思う。そこに何らかの備えがあれば、もっと救えた命があったのかもしれない。

想定する敷地は非市街地にあり、河川が近く氾濫による水害のおそれのある地域でもある。そこに一定数の地域住民が避難し、水害をやり過ごすことのできる住宅を提案する。(場合によっては津波浸水地域も視野に入れても構わない) 災害への備えとして、自身や同居する家族以外の地域住民も対象とするところにこの住宅の『太っ腹』がある。ここに皆が避難することで、災害時の救助が円滑に進められるという点からも世のため人のための『太っ腹』と解釈できると考えた。



※用途地域は2種住専~を想定